

洋画使用の大学英語教育

— 一つの提案 —

中 井 紀 明

- 1 はじめに（英語教師が反省すべきではないか）
- 2 救世主・映画教材の出現
- 3 英語教育の三つの欠陥
- 4 映画教材とわが国の英語教育
- 5 洋画導入への具体的提案
- 6 むすび（まだ訳読をやっていて良いのだろうか）

1 はじめに（英語教師が反省すべきではないか）

これだけ毎日努力しているのに日本人はなぜ英語が下手なのだろうか。中学から英語、英語と言われ、大学受験では英語はどの教科よりも重視され、合否の鍵を握っている。英語を征するものは未来を征すると、大学受験の名の下に若者は英語学習を強制され半ば脅迫されている。しかしそれなのに、長年英語をやっている割には、文法に「精通」している割には、我々は英語が聞けないし話せない。これだけ英語学習をしているのに我々の英語下手は海外に広く知れ渡っている。外国人と話しながら日本人研究者・学生の多くは落ち着きがなく、神経質そうにおどおどしている。時には相手がさりげなく使った英語の言葉が分からなかったり、時には絞り出すように使ってみた英語が通じなかったりして、どうしようかおろおろして彼らは卑屈さを振りまいている。彼らの語学力を養成した英語教師として自責の念に駆られるべき

ではないだろうか。日本人が国際的な舞台で本領を発揮できないとしたら、我々英語教師が養成している語学力がその一つの原因になっている可能性が大いにある。

これだけ努力しても成果が芳しくないのは、我々に外国語学習能力がないからではなく、学習方法に問題があるからではないだろうか。言語学習には向かない、不自然な方法で我々は学習してきたのではないだろうか。言語学習の王道を我々は歩んで来なかったのではないだろうか。我々の現状を真剣に考えてみると、方法が悪いというよりは、一層深刻な根深い悪弊が潜んでいるように思える。

学生の英語力が思うように付かない時には、英語教師の多くはどうするだろうか。その原因を自分の英語教育方法に見いだして、その方法を再検討するだろうか。ただ偏差値を元に「できない」学生を責めるのではないだろうか。自分の英語教育法で生徒が期待するほど顕著な語学力を付けていないように思えても、我々は多分その原因を自分の英語教育方法に見いだしてその方法を再検討するようなことはしない。それほど吟味・検討を加えずに行っている、「教育法」などとはおこがましくてとても言えないような、訳読に我々は固執するだろう。

ここの学生はレベルが低い、頭が悪い、意欲がない、などといつも学生のせいにするのはやめようではないか。現在採っている訳読による英語教育方法を無批判に優先させるのではなく、語学力を切実に付けたがっている学生を優先させるべきである。学生が効率のよい成果を上げ得たかが問題なのであって、学習効果が上がらなかつたら、その方法を再検討して部分修正するか全く新しい方法を考え出すべきである。

読んで訳してという旧態依然たる教育法が全国で幅広く行われているのを見ると、英語教育を改革しなければならないという必要性を「大学自治」の美名の下に大学英語教師の多くは無視し続けているのではないかと思えてくる。外国語学習・教育が応用言語学のもっとも大きな研究領域になっていると聞いているのに、英語教授法、第二外国語としての英語などの専門家たち

は一体何をしているのだろうか。もし第二外国語の効果的学習法が最近の研究で発見されているのなら、我々文学畑に属する英語教師にもそれを採用するよう説得して欲しい。「教養英語」で文学作品とか論理的なエッセイを読むと学生に語学力が格段に付くという根拠が私にあるわけではないのだから、説得された、顕著な効果の上がる学習方法を採用する用意が私にはいつでもある。もし無いなら、その方法を開発して我々に示して欲しい。JACET に所属する、英語教育の専門家を自称する教員が何のためらいもなく読んで訳してという旧態依然たる授業をやっているのは理解に苦しむことである。大抵の大学は「学問・研究の自由」の名の下に学生のことなど一切配慮しないで、授業内容、教材の選択などを教員各自の判断に任せている。しかしなぜかくかくの教科書を1年のかくかくのクラスで教え、2年のかくかくのクラスではこの教科書を教えなければならないかという必然性をうまく説明できないのである。英語教材としての効果はどうか、など一切無視して自分の「専門」に関連のある教材（語源を扱ったもの、仏教の教典を英訳したもの、夏目漱石の英訳本など）を「教養」英語の名のもとに教えている教師もいる。1年次の英語2科目の担当者は『アメリカ女流作家短編集』と『オーウェル評論集』をそれぞれ教科書として採用し、2年次の先生は一転してクイズのような問いが溢れている会話教本を教科書として採用する。この1年から2年への流れには何の計画性もない。大学「教養英語」全体を学習者の立場を考慮し体系化して、「教養英語」で最低これだけの語学力を付けさせるとプログラム化している大学はあるのだろうか。我が国の大学生にふさわしい「教養英語」のプログラムをどこかの大学の「専門家」が開発し、大学「教養英語」を体系的に教えて目に見える顕著な効果を挙げている。このような嬉しい評判を寡聞にして私は聞いたことがない。我々が目の当たりにしている大学「教養英語」の現状は、自由とか自治とかいうものではなく、学生に対する思いやりのなさであり、無責任である。こういう我々の態度がまかり通っているのは、我が国の大学の後進性の一つの表れだと私は思う。

病気を治すのに効果がない医療法や薬は医学会、薬学会では認められるこ

とはまずないであろう。治療効果の上がらぬ薬を投与し続ける医者は薬品会社の手先の悪徳医か無能な医者である。しかし有効ではない教育方法がなんらかの理由で採り続けられるということは大いにあり得ることである。真の語学力を付けられない英語教育法が依然としてまかり通っている。英語教科書で莫大な利益を上げる悪徳教師は考えにくいので、我々の大部分は、学習効果とか学生の立場など一切お構いなしの、意欲のない無能教師なのではないだろうか。英語はこつこつと毎日努力しなさい、とか抽象的な当り障りのない教訓を学生に押し付けて、指導の義務を果たした気になっている。学生の努力に責任を押し付けてはいけない。効率よい学習教材を開発しようとしなさい、義務回避の無責任教師というのが我々の真の姿ではないだろうか。

効果の上がらない不自然な英語学習方法を日本人英語学習者に我々は教えている。英語教育が悪いのではないだろうか。日増しに高まっている我々英語教師に対するこのような社会の批判は厳しいが正当なものである。この社会の批判に我々は真摯に応えなければならない。我が国の英語教育は変わらなければならない。これだけ多くの国民がとてつもないエネルギーを英語学習に注いでも、一向にはっきりとした成果が上がらないのは国家的大損失ではないだろうか。この大きな国家的損失をなんの良心の仮借も覚えないで放置している最大の責任者は誰であろうか。旧態依然たる訳読に終始して本格的に英語教育法を開発しようとしなさい我々ではないだろうか。(細かいことなど分かり得ない) 文部省が放置しているから悪いなどという次元の問題ではない。社会の我々への批判に対して、学生のせいにしてたり文部省のせいにしてたりせずに、我々が真剣に応えるべき時期に来ている。

我々は各大学で「教養英語」のプログラムを工夫しなければならない。ちょうど日進月歩の日本語ワープロ開発競争のように、各大学で英語教師が協力して「教養英語」プログラム開発競争をすべきである。効果が出なかったら原因を探ってそれを除去しさらに工夫・改良を重ねる。各大学はそれぞれの「教養英語」の「メニュー」を公にして、私どもの大学に来ればかくかくの語学力が付く、と受験生に知らせる。一方、受験生はこれを志望校決定の重

要な判断材料にする。こういう時代が来るなら、現在の「偏差値」偏重の受験戦争より、よほど意味のある大学選択が行われるのではないだろうか。

「教養英語」の体系的プログラムがまだ未開発であるこの時期においては、文学理論、アメリカ文学を専門とする私のような英語教育の「素人」からの提言が大学「教養英語」に関してあっても良いのではないだろうか。いくつもの大学で20年に亘って「教養英語」を担当して来て、なぜ努力している日本人になかなか語学力が付かないのかに関してある程度の考えが私なりにあるからである。本稿で私が述べることはいわば「外野」からの発言である。打者（学習者）も内・外野を守る者（様々なレベルで教える英語教師）も投手（「英語教育法」の専門家）が（英語教育の切り札とも言うべき）生きた球をびしっと投げ込むことを期待しているのに、次々に登板する投手は投球フォームが格好いいかばかり気にしているのか、暴投や一見してボールと分かるコースにばかり投げ込んでいるように見える。外野から見ていると、これでは打者の打撃練習にならないのは勿論、内・外野の守備練習もあまり出来ない状態なのである。次々に登板してくる投手があまりにも頼りないので、外野を守っていた、投手としてはずぶの素人が、「私にも試しに2・3球投げさせてもらえないか」と申し出てきた、と考えて頂きたい。外野からこの20年近く見てきて、主役の投手は何をしているのか、監督・コーチ（文部省・大学当局・教授会・英語教育の専門学会）は一体何を考えているのだろうかと思わざるを得ない。

数年前とは段違いに利用し易くなった映画という素晴らしい教材を最近大量に手に入れて、後述するような意味で、年甲斐も無く私は興奮した。このことが分不相応の登板申込の理由である。わが国英語教育の悪い「三つの欠陥」と私が長年考えてきたこと（〔1〕訳読中心主義〔2〕文法至上主義〔3〕学生の側の表現意欲の少なさ）を正す可能性を今までのどの教材よりも映画教材は秘めていると私には思えるのである。映画はわが国英語教育の救世主ではないだろうか。靴の上から痒みを搔くような感じしか与えられなかった語学教育を、文明の利器を存分に利用することにより、革命的に改善

出来るかも知れない。

2 救世主・映画教材の出現

映画は昔から優れた語学教材であったが、最近格段に使い易くなった。昔は洋画が来ると映画館に朝から出かけ音声をテープレコーダーで録音したものである。しかしサウンド・トラックを手に入れても、率直に言うと、音声だけでは分からない表現、聞き取れない表現が私には多く、教室ではとても使う気になれなかった。この意味で洋画ビデオの多くに英語の字幕 (caption) が付くようになったことは誠に嬉しい。この caption というのは、全米の耳の不自由な人達も映画が楽しめるように民間の寄付を仰いで奉仕団体が多くの映画に付けたものである。外国語学習においては外国人はまさに「耳の不自由な人」なのである。これをアダプターを介して取り出し、プリントアウトする。この「台本」を教科書にしてLL授業を効果的に運ぶことが出来るようになった。この英語字幕入り洋画の出現によって、日本の英語教育もやっと革命的に変わるだろうと英語教育に携わる教師の一部から諸手を挙げて歓迎されている。最近全国の大学英語教師の間でも、洋画の大学英語教育への本格的導入が検討され始めていると聞く。ビデオ機器の普及、英語字幕入り洋画ビデオソフトの普及・拡大・充実、さらに2500冊以上の完全な映画シナリオが英語字幕の不完全さ（画面の制約があるために英語字幕は100パーセント完全に台詞を拾っているわけではない）を補うような形で手に入るようになったことも重なって、従来から優秀な教材であった映画が、英語学習の理想的教材としてこの数年脚光を浴びるようになった。救い難い泥沼にはまっている大学「教養英語」を、後述する様々な利点を持つ映画教材が救うのではないだろうか。今こそ英語教育への本格的導入をソフト・ハードの両面から企画・準備・実施する時期が到来したと私は考える。

格段に使用し易くなったこの映画教材を89年度担当科目（桃山学院大学5齣、岡山大学3齣）全てで私は採用してみた。前期に使用して見たものは

Alfred Hitchcock 監督の *Spellbound*, *Notorious*, *The Birds*, Stanley Kramer 監督の *Guess Who's Coming to Dinner*, Cyril Coke 監督 (BBC 製作) の *Pride and Prejudice*, Frank Capra 監督の *It's a Wonderful Life*, *It Happened One Night*, Mike Nichols 監督の *The Graduate* の 8 作品である。¹⁾ 実際に使用してみて様々な意味での興奮を年甲斐も無く覚える毎日である。読んで訳しての授業とは受講生は反応の点で格段の違いを示す。彼らの興味の示し方が全く違っていることに私は興奮を覚える。つまらなさそうに原文を読んで訳本を読んでいる学生を見ているより、目を輝かせてヒッチコックやキャプラの名画を見ている学生に私は喜びと興奮を覚える。喜んでいてる学生を前にして、89年度前期の間映画教材の優秀生を列挙してみた。そして列挙しながら、社会が嘆き・糾弾し、英語教師も認めざるを得なくなっている悪しき英語教育法への批判に、英語教師の方からやっと代案を示して応えることが出来るのではないかと思えてきて、また興奮を覚えるのである。映画教材は後述する悪しき旧弊を断ち切る、現状打破の可能性を秘めた革命的な教材ではないだろうか。

ここで教材としての映画の利点を半期使ってみた感想として列挙してみたら、次の様な多くの数に上った。1 から 8 までが教材の使い勝手に関わるもので、9 から 14 までは映画の内容に関わるものである。

- 1 授業での様々な工夫が出来る教材。(年に一本の洋画を詳細に見ることも出来る。前期中になるべく早くある程度の理解で最後まで見せ、後期はそれを土台に応用・展開を計ることが出来る。前期試験は [1] 聞き取り能力テストと、[2] 慣用表現などの意味が分かっているかをなるべく訳以外の方法でチェックする。後期試験はテキストに出てくる *useful expressions* を使って自分の観点から書かせる。あるいは、やり方を変えて一クラスで年間四、五本の映画を見せることが出来るようになるかもしれない。)
- 2 一度に一気に見せられる。(1年に1冊の短編・中編・長編小説を時

間をかけて精読する時、丸1年もかかって遅くしか読めないということは受講生の教材への興味の喚起・持続という点で問題がある。）

- 3 何度でも再生してしつこく見・聞ける。（“Excuse me” や “I beg your pardon” を繰り返して、母国語として英語を話す人に嫌な顔をされ、外国語学習の惨めさを味わったことがない人がいるだろうか。彼らの冷たい反応に恐れをなし外国語学習から遠ざかる人がなんと多いことか。映画の中では、イングリッド・バーグマンのような絶世の美女が、何一つ嫌な顔をせずに理想的な英語教師の役割を果たしてくれる。）
- 4 安価で時間的ロスが少なくて済む教材。（ロイアル・シェイクスピア・カンパニーのシェイクスピア劇を見にはるばるロンドンに飛んだり、大阪年金会館ホールに往復3時間かけて行ったりすると、その金銭的・時間的負担は大きい。外国語学習には英米に留学するのが望ましいが、時間的・経済的負担が極めて大きい。映画の場合は、いつでもどこでもソフトとハードがあれば、留学するより効率良く安く、英語での日常体験を映画で我々はかいま見る。映画は海外での日常体験を凝縮したもので、極めて効率のよい、コスト・パフォーマンスの高い教材である。）
- 5 映画は不自然な「分かりやすい」遅いスピードではなく、日常生活の自然なスピードに限りなく近い。（我々が習う英会話教材が「分かりやすい」遅いスピードであるために、かえって我々は日常会話の自然なスピードについていけなくなっている。）
- 6 良い映画はテレビ・ドラマより概ね台本がしっかりしている。
- 7 英語字幕付き映画が多数出回るようになった。（120分もので約30頁の台本が簡単に出来る。また英語字幕を2HDのフロッピーに入れて²⁾穴埋めなどの試験問題がパソコンですぐ作成出来る。）
- 8 完全台本も手に入るようになった。（英語字幕付きビデオは画期的ではあるが、画面の空間的制約があるために1割から2割は要約されたり他の語に置き換えられている。この不完全な英語字幕台本に不満足なら、作品によっては映画の台詞と一字一句違わない完全台本が、出版された

りコピーで手に入るようになった。そのためまだ字幕の付いていない洋画も授業で使えるようになった。)

- 9 映画の言語部分が分からなくても学習者はある程度耐えられる。(名優たちの演技への視覚的・非言語的理解があって、学生はそれなりにある程度分かる。)
- 10 印象深くて記憶に残る状況が映画には多く出てくる。(印象深いシーンを通して英語表現を覚えさせるのが英語の授業の本道ではないだろうか。映画はこの本道のための最上の教材である。たとえ「第二外国語としての英語」で博士号を取っているアメリカ人にも、映画の印象深いシーン以上のものを教壇で演じてもらえないのではないだろうか。)
- 11 映画では日常生活が中心に描かれている。(映画の画面は日常を再生する。テキストの背後へ、背後へと消えていこうとする教科書の活字からの情報を、画面は視覚・聴覚的に現実の日常生活と寸分違わないと思わせるような形で我々の中に進入させてくれる。教科書の活字情報は、目から入って頭の所で「処理」されてしまう感が強かった。しかしこの情報も一旦画面に乗ると見る人の視覚・聴覚を存分に揺さぶって、あたかも日常生活情報のように、活字情報とは比べものにならない様々な衝撃を我々に与えてくれる。映画はその日常性・具体性で見る者に「臨場感」を与えるのである。教材としての情報密度は映画における方が現実の日常より概して濃い。洋画を10本、20本、50本、100本、500本、1000本と学習していく内に、我々は英語での日常体験を相当かいま見たと言えるのではないだろうか。その段階では我々は相当な語学力を身につけているのではないだろうか。)
- 12 映画の日常性にもかかわらず、題材・テーマは幼稚ではない。³⁾ (映画教材のテーマや技法を取り上げれば、学生たちを一層深い考察に導くことが出来る。単調で厭な英語学習ではなく、映画研究という体裁を採って学生の知的好奇心、知的虚栄心を擽るのもよいだろう。「教養英語」だから教養というオブラートで英語学習という苦い体験を包むの

だ。)

- 13 感動的な教材。(映画鑑賞は、演劇鑑賞と同じように、学生に深い感動を覚えさせることが出来る。これは無味単調になりがちな外国語学習を救う大きな要素である。)
- 14 読み偏重の英語学習から脱皮出来る教材。(受験勉強の過程で頁の上に平面化され死語化されていた生きた英語を、大学「教養英語」は状況の中に入れ蘇生・立体化し、その立体性を学習者に見せなければならない。生き身の人間がああいう状態でこういう気持ちで言っているのだ、ああ英語ではこう言うのだ。このような認識・確認の瞬間瞬間を数多く積み重ねることが生きた英語教育には絶対必要である。大学「教養英語」は「受験英語」という読み偏重の学習法から、実用英語という話すこと重視の授業へのつなぎの役割を、聞くことを重視することによって暫く果たさなければならないのではないだろうか。大学「教養英語」は会話学校の授業とは違うべきだ。読む授業から聞く授業へのつなぎの過程への理想的教科書として映画にはシナリオがある。学習者は教科書としてシナリオ台本を「読み」、映画を「見」「聞く」ことが出来る。我々の英語力は概ね読む力が中心で、断じて読む・聞く・書く・話すの四能力全般に亘るものではない。映画によって聞く力が養成されて、読む能力偏重から全般的英語力への脱皮が計られるかも知れない。)

3 英語教育の三つの欠陥

以上映画の利点を14点思い付くままに挙げてみたが、私が特にその可能性を思い興奮もし嬉しくもあるのは、日本の今までの英語教育のディレンマから抜け出すのに洋画ビデオは有効ではないかということである。努力している日本人に語学力がなかなか付かないのは三つの原因のせいだと私は述べた。つまり我々の受けてきた英語教育は三つの柱（〔1〕訳読中心主義〔2〕文法至上主義〔3〕表現意欲の少なさ）の上に建ってきたのであった。教材とし

での映画ビデオはこれら三つの長年の悪弊を打破してくれる可能性を秘めていると私は考える。

我が国の大学「教養英語」における洋画の「効用」について述べる前に、この「三つの欠陥」についてここで詳しく説明しなければならない。[1][2]は高学年に進むにつれて一層徹底していく奇妙な悪弊である。[3]は日本の教育制度、あるいは文化全般に広く蔓延している悪しき抑圧に関係がある。

[1]の訳読中心主義とは、読解力を主に訳読によって養成しようとするのが、我が国の英語教育の主たる目標だという意味である。我が国のはテキスト情報を日本語に翻訳して受け取ること为目标にした語学教育で、こちらから何かを英語で発表することを目標にしてはいない。大抵の「教養英語」は英語学習の場ではなくて、日本語への翻訳練習の場になっている。このことは全国の英語教科書出版目録を見れば分かる。読んで訳して1年間を終えられるような分量の教科書が大部分なのである。英語学習に国語学習効果を認めて重要な作文教育を看過している職務怠慢の情けない国語の先生も多いが、これ又情けないことに「英語学習の国語学習への貢献」を標榜する英語の先生も多い。彼らは英語を教えることを諦めているのだろうか。我々の指導する英語学習は英語学習と言いながら実は日本語へ日本語へと回帰している。「教養英語」の学習で日本語が果たしている役割を検討して、効果のある英語学習に母国語としての日本語が果たす役割を考えるべきである。現在の訳読中心の外国語学習では、母国語が外国語学習の邪魔をしている。

中学では比較的オーディオ・ビジュアルな教材を使っているが、高校では受験英語には邪魔とばかりオーディオ・ビジュアルな面は徹底的に軽視・無視される。県によって外国人英語教師をいくつかの高校に配しているが、現場では受験英語指導の邪魔になると言って迷惑がっていると聞く。せっかくの生きた音の情報を外国人英語教師から十分に吸収せずに、高校生はノートに英語原文と日本語訳を並べてきっちり書き込んでいる。この習慣が大学入学後も続き、ノートの左側に日本語訳を書いて来て、授業中に先生の訳を右

側に書き加える「真面目な」努力家もいる。試験ともなると大きな大学では院生による誤訳だらけのプリント訳本が出回り、小さな大学ではクラス全体の発案で手分けして出題範囲内の全訳がなされコピーで出回る。大学に入って来る学生には翻訳への脅迫観念があって、あたかも英語を習わず日本語に帰ろうとするかのような衝動が植え付けられているみたいなのである。英語テキストの翻訳を通して日本語へ日本語へと回帰していく授業でどうして英語が学習出来るだろうか。このような授業では我々は英語ではなく日本語を習ってきたのである。英語力が付かなかったのもむべなるかなである。

〔2〕の文法至上主義に付いて説明しよう。状況は無数にあるのだから、そこに現れる無数の表現をその都度暗記することなどとても出来ない。だから数多い例文を共通の規則に纏めて文法とし、文法の学習を核にすることによって少しでも英語学習を効率良くしよう。これが我々のしてきたことであった。英語の「文法」を教えることによって英語学習の省エネを計ろうと我々はしてきたのではないだろうか。ノックを100本200本1000本と受けなければならぬのに3本で打ち切られて、後は家で『3塁の守り方』という本を読みなさいと監督に言われる。そして実際の試合で本に書いてあったことを思い出しながら守備をして失策を重ねる。日本の英語学習者は丁度このような3塁手に似ていないだろうか。しかし、我々は概ね英語が下手だという現実を考えれば、我々の受けてきた文法による省エネ学習は不自然な英語学習で邪道だったのではないだろうか。英語教師は文法に期待を掛け過ぎないようにしなければならない。クラスの全員を英語学研究者に育てようとするような情熱で英語の文法を教えるはいけない。英語の文法を習うのではなく、私の表現の中に生きる英語表現を覚えなければならない。

「外国語」学習のハンディキャップを英文法知識の養成で少なくしようとするのは十分理解出来ることである。文法の知識は、補助として役立っているだろう。しかし「状況の知識」を実感することが少ない学習者には、いくら文法の知識を積み重ねてもそれは状況・場面への思い入れを欠いた、単なる形而上学的知識に終始してしまう。我が国の優れた英語学研究者が英語で

必ずしも流暢に意思疎通が出来るとは限らないのはこのせいであろう。生きた英語を学ぼうと希望している生徒に我々教師がさせてはならないことは、英語を突き放して、つまり文法知識の対象、文法知識による分析の対象として、見ることである。しかし我々はさせてはいけないことを徹底的にしてきたのではないだろうか。「受験」英語は我が国の受験生を全て英語学者、英文法の専門家に養成しようとしているかのようである。文法家になるより、自分の言いたいことを表現でき、相手の表現のレトリックまで充分に分かるようになることの方が大部分の人にとっては切実な問題である。文法書を読みながら我々は日本語を幼児から「学習」してきただろうか。我々が受験を意識して英語を勉強してきたような英語に対する突き放した「形而上性」（この語に付いては後で説明する）は幼児の母国語学習にはいっさい無いはずである。外国語学習では、文法知識で「状況の知識」を代用して外国語学習の省エネ化を計ろうとすればするほど、聞き・話す面での生きた語学力に乏しくなる。今更幼児と同じ速度で学習などしておれないのだから、教材を効率よく体系的に組んで学習効果のスピードアップを計らねばならないのは言うまでもない。しかし我々は豊富な実例に学習者を晒すという言語学習の鉄則を踏まずに、文法でけりをつけようとし過ぎたのではないだろうか。いくら文法を学習しても、話すことも書くことも我々は出来なかった。我々はこのことを思い出すべきである。

最後に〔3〕の表現意欲の少なさに付いて説明しよう。文法家になるより、自分の言いたいことを表現でき、相手の表現のレトリックまで充分に分かるようになることの方が大部分の人にとっては切実な問題なのではないだろうか。意見を言うことを奨励・訓練する教育を日本語でもあまりしていないのに、なぜ外国語の英語で話すようになったら急に言えるだろうか。言おうとすることによって言うことを開発する必要がある。また各自言いたいことがあるのだと悟らせる教育が国語教育、社会科教育などで必要であろう。表現（言う、書く）を学習することは、言うべき意見を養成・奨励する努力と並行して行われなければならない。言いたいことがある学生が、外国語学習で

もやはり伸びるのではないだろうか。

学生の中で表現意欲を増す工夫が必要である。日本人大学生が表現に使用しがちな語彙、構文などを前もって学習させておくなどの表現を助ける工夫が必要になるだろう。教科書原文の理解と英語表現をどう連続させるかも考えなければならない。英語の旨い表現を急いで最初から暗記のために暗記させてはいけない。まずその表現の背後に広がる「状況の知識」を映像で徹底的に見せ・聞かせる。そして今度はそれを自分の表現の中で自分と世界との結び目として使わせてみる。こうして使用して初めて、この英語表現は印象深く学習されるのではないだろうか。

4 映画教材と我が国の英語教育

さて、さきほど列挙した様々な利点を持つ映画は、我が国の英語教育のこれら「三つの欠陥」をどう除去してくれるのであろうか。つまり映画教材が我が国の英語教育にどう貢献するかを、次に考察してみたい。

「臨場感」と「形而上性」の二つを外国語学習では旨く組み合わせなければならない、と私はまず論じたい。前者は教材と自分との繋がりに関することである。後者は私の造語である。文法がどうのとか、語源がどうのとか、接頭語がどうのとか、イントネーションがどうのとか、つまり学習している言語を突き放し学問・研究対象として観ようとする態度である。

言葉は無味乾燥な単なる活字ではなく、関わりのある人をなんらかの意味で揺り動かす行為である。言葉を発する・聞くということは、世界がまさに動いている場に「居合わせる」ことである。言語行為は人と人との関係の現れであり、二人の言語行為の軌跡はその関係の変化である。関係という網の目の中に巻き込まれた、その中で役割を果たしている、という意識が言語行為の中に必ずある。つまり、臨場感を伴ったこの意識が無い限り、我々は言語を修得できない。利害関係でこの世界と私・話し手は結びついている。関係の網の目を世界の中に言葉は作り出していくと、この臨場感は教える。

この言語の基本的感覚を欠いては、オームの繰り返しのような機械的パターン・プラクテスを幾ら人為的にやっても生きた言語学習はされない。

「形而上性」は前述した文法至上主義の背後にある原理である。英語の具体的現象（日常会話）ではなく現象の背後にある根本原理を確実に掴もうとして、「形而上」学者は日常卑近な会話の場から離れて行こうとする。根本原理を知れば、臨場感で掴む言語情報を確かに効率よく学習していくことが出来る。特に母国語以外の言語学習の際には「形而上性」はどうしても必要不可欠のものであろう。幼児の言語習得時のようにたっぷり時間をかけた「自然な」学習方法を、我々は英語学習で採るわけにはいかないからである。どうしても省エネの方法を採用せざるを得ない。我々の「形而上性」を全面に押し出して効率を考えねば、我々の残り少ない人生に時間は余り残されていないように思えるのである。成人してからの外国語学習の効率は臨場感だけでは確かに悪くなる。

しかし「形而上性」だけでは、世間へと広がっていく言語の網の目感を学習者は掴めず、学習中の外国語は書斎の言語に退化していく。外国語の「形而上」的魅力は麻薬のような効き目があるということを我々は知らねばならない。「形而上性」は、強力な麻薬的力で言語学習の基本、臨場感の必要性を忘れさせてしまう。学習者を知らぬ間に日常から遠ざけ、日常を軽視・蔑視させてしまうのである。我が国の英語教育は臨場感を無視して、「形而上性」を強調し過ぎるのである。日常を無視した形而上学者は日常を理解できなくなり、日常で生きて行けなくなる。言語体験は状況に関する知識を与えるものだから、状況と言葉を学習者が十分に結び付けられるように、状況を叩き込む必要がある。この必要性を映画ほど満たしてくれる教材は他には無い。臨場感を与えて「状況の知識」を学生に根付かせる教材が極めて少ない時に、映画は理想の教材として真価を見せ始めている。外国語学習における「形而上性」がもたらしている文法への依頼心を、映画の日常性・臨場感が断ち切ってくれるのではないだろうか。

日本人学習者の日本語訳への脅迫観念には理由が無いわけではなかった。

日本語訳への脅迫観念が外国語学習の際に現れるのは、背後に外国語への違和感が潜んでいるからである。教材を読んでも、学生は臨場感をなかなか得ることが出来ない。教材に付いての「状況の知識」の欠如を、日本人は「状況の知識」を得易い母国語によって無意識の内に補おうとしてきたのではないだろうか。臨場感を学生が十分に得ることが出来れば、学生の日本語訳への拘りは簡単に消える。脅迫観念としての翻訳の必要性を学習者が感じないほど徹底的に洋画ビデオを見せて「状況の知識」を十分に与える。落ちついて気楽に接することの出来る懐かしい日本語の中へ学生を追い戻すのではなく、テキストの徹底的な状況化（この面で洋画の助けは大きい）によって翻訳の必要性を学生が感じないようにし、英語の音の中へ学生を導く。音としての英語の知識が学生の中で増大することを我々は目指すべきである。状況の中で展開する英語を聴覚と視覚で学生に理解させる。洋画ビデオの素晴らしい特徴である臨場感で我が国英語教育の癌の原因の一つである「訳読中心主義」を圧倒してしまうのである。言葉を暗記させるのなら、「状況の暗記」からを鉄則にする。徹底的に見せ、聞かせて状況の理解を十二分にする。画面を通して十二分に提供されるこの「状況の知識」が、英語への違和感を払拭してくれるのではないだろうか。

テキストを見ながらの学習を出来るだけ早く脱却し、画面を見ながら音を聞きながらの学習を繰り返して、ああこういう時にはこう言うのかと切実に思わせることが必要である。オールラウンドな語学力養成を目指すのなら、学習者を教科書に戻したら元の黙阿彌である。せっかく映画を授業中に見せても、家庭での予習・復習・試験のための学習が全て教科書台本での今までどりの事実上の訳読ばかりに終始するなら、今までの読んで訳しての授業と大同小異のものになってしまう。まず授業中に学習者の視覚・聴覚を動員させて、ビデオで「状況の知識」を徹底的に叩き込む。家庭での学習に際してもビデオの活用が望ましいが、まだ高価であるために家庭での視覚的な訓練を受講生全員に課すことは出来ないかも知れない。しかし音楽など不必要な効果音を省略したオーディオ・テープを全員に与えてそれをいわば教科書

のように思わせてことある毎に聞かせたらどうだろうか。学生は今までの悪しき習慣から視覚的にのみ教科書に戻って行こうとするから、英語教師は彼らを音へ、音へと導くように様々な工夫をしなければならない。ぼーっとではなく学習効果が出るようにいかに聞かせるか、工夫しなければならない。パソコンで簡単に出来る穴埋め問題を毎時間渡して、穴の部分に注意させて聞かせる。頻繁に穴の部分を変えていく。あるいは、ある程度聞かせて分かりにくい箇所を調査し意識的にその箇所を暗記させ、そのあとで暗記したものを確認・認識するという形で聞き取り能力を養成する方が、闇雲に聞かせるより良くはないだろうか。活字を見なくても音だけで十分分かるのだということを、あらゆる方法を駆使して学生に納得させなければならない。

日本語訳への脅迫観念と文法至上主義という我が国英語教育の二つの欠陥に洋画がどう立ち向かって行くか、その可能性をかいまみたが、それでは次に第三の表現の問題を、洋画を採用することでどう解決すべきであろうか。

表現の面は急がない方がよい。例文をたっぷり与えずに和文英訳を要求するのは、文法によって文を作れと要求するのと同じである。大した例文も与えないで、いちいち恩着せがましく試験をしないほうが良い。「状況の知識」を潤沢に詰め込んだ例文を数多く学生に与える努力をしないで、教師は文法的説明で事を済ませようとして来た。一方学生は日本語訳への回帰と文法依存で「状況の知識」を欠いた例文を補おうとして来たのであった。

我々が覚えた英語表現の蓄え、つまり我々の頭の中にある英語辞書は、小さくて使いものにならない。だから英語で表現しなければならない状況に陥ると、容量の小さい英語辞書にアクセスすることを我々は早々に諦める。その代わりに、日本語表現の蓄えである日本語辞書にまずアクセスし、次に英文法知識の蓄えてある英文法辞典にアクセスする。そして異常とも言える程の時間を掛けて出てきた英語表現は、文法に従ってはいるが不自然で極めて人工的な和文英訳である。ふさわしい英語表現を求めて英語辞書にアクセスすべきなのに、我々は日本語辞書や英文法辞典にアクセスを試みているのである。

つまり我々が英語での表現が下手なのは、何よりも我々の中の英語辞書が小さ過ぎるのである。我々の辞書は「犬」の項目からしかアクセス出来ないように日本語中心になっているのではないか。つまり dog という項目からは我々の辞書にアクセス出来ないのではないか。「日本語の〈犬〉に相当する英単語は “dog” 」とか、「 “dog” の訳語は〈犬〉」いう風に我々は英語の単語を日本語の網の目の中に入れて我々の辞書に登録しているのではないか。極論すると、我々の辞書には dog の項目はないのではないだろうか。

英語表現実例を「状況の知識」と共にたっぷり与えて置けば、英語を母国語とする人達と我々との共通項である「状況の知識」(もちろんこの共通項に微妙なずれや、あるいは共通項とはとても言えない時もある)に頼って、日本語辞書とか英文法辞典にアクセスすることなく、ふさわしい英語表現を学生は直接英語辞書に求めることが出来る。数多くの洋画ビデオで状況と英語表現を、日本語を介さずに学習者にしっかりと結び付けさせておけば、状況を共通項にして、別に日本語から英語に翻訳しなくても、日本語表現に歪められることもなく英語表現が高速で出てくるのではないだろうか。母国語という梯子を出来るだけ早く外して、英語辞書に英単語・句として登録される程度にまで英語の網の目の中できっちりと英語を覚えるべきではないだろうか。

散歩に幼稚園に行こうと、5回、10回と2歳の子供に言っているとその内に「ちえん」と言うようになる。子供は大人の話すのをたっぷり聞いてから、語尾のほうから再生し出す。このことから、他者の言語表現をまず聞き、そして次にまねることから子供の言語表現が始まる事が分かる。受け身の観点からではなく能動的に(つまり表現に使おうと待ち構えて)聞いている学生に、ある慣用表現の多様な展開例を多数の実例場面で画面に提示する。最初はそれをまず徹底的に見・聞き英語の音に耳を晒し慣れるだけで良しとしなければならない。(我々が話せないのはまず聞き方が足りないからである。たっぷり聞かせることもしないで、学生に英語での表現力を最初から要求するのは酷である。更に我々日本人には、英語で話す機会が足りないし、わざ

わざ英語で話す話題も無い。)そして大量の映画をかいまみて、「状況の知識」を収集させる。それが学習者の中に充満して来れば、今度は単なる暗記・ものまねでも良いのではないだろうか。

子供にとって近親者が国語学習の最上の教師であろう。彼らが話すのを子供は極めて注意深く聞いている。だから突然思いがけない時にびっくりするような難しい言葉を子供は言う。何遍もじっと聞いていた言葉がある日突然表に出てきて、表現の中に生かされてくる。近親者が驚き・喜び・感心するのを糧に、子供たちは励まされて言葉をどんどん習得していく。我々は外国語に関してこれほど我々のことを親身に思ってくれる近親者を持たない。ビデオ洋画の登場人物を我々の近親者に見立てようではないか。子供がまず近親者から国語を学ぶように、我々外国語学習者はビデオの登場人物から学ぶことが出来る。喜びに輝く顔で言語習得に努力する子供を励ますようなことを、ビデオの登場人物はしてくれないが、何回でも嫌な顔一つせずに繰り返してくれる。この点は近親者以上である。この優秀な教師に存分に活躍して貰わなければならない。

入力した台本の英語表現情報をどういう観点から整理・体系化するかよく考えてみなければならない。表現に使用することを念頭に置いて、学生が表現に再生し易いように整理出来ないであろうか。そのために日本語・英語の両面から単語の頻度調査をする必要がある。英語を聞いたり読むためにどの程度の英語語彙が必要なのか。映画台本などを入力した英語表現データベースからコンコーダンスを作って、頻度の高いものから集中的に学習させたらどうか。このいわば「理解用の語彙」の他に、英語で話し書くための「表現用語彙」の頻度調査もして両者を体系的に関連させて学習させなければならない。全国の大学に先駆けて本学で実施されている「論文作法」の作品集などで、大学生の表現の実態を研究する必要があるだろう。注8で上げているThe Annenberg/CPB Projectの英語字幕をハードディスクに入れて頻度分析すれば、学生が英語で表現する際に必要とする語彙・構文がかなり潤沢に入っているのではないだろうか。

日本語での彼らの表現を調べ、彼らの表現に必要な日本語語彙に対応する英語の語彙・構文を「理解用」英語語彙の養成の所で前もって徹底的に見せ・聞かせたらどうか。英語で表現する際に文法に助けを求める必要性を学生が全く感じないほど、潤沢に理解用語彙、表現用語彙の例文を学生に見せる。表現は規則ではなく慣用であることが多い。英文法に依存した和文英訳では表現力はいつまでも付かない。⁴⁾「状況の知識」を欠いた言語表現学習はいつまでたってもものにならないのである。

強力な印象として学習者の中に残るその「状況の知識」を背景に基本となる表現パターンを着実に身に付けさせる。学習した基本となるこの表現パターンを核にして、次々と核を広げていったらどうだろうか。後は自然増殖に任せればよいという核が、英語学習にもありはしないだろうか。表現に使うこと、核の一部にすることを念頭において映画の台本英語情報を編集する。真珠養殖のように、英語学習でもまず核をしっかりと人工的に植え付けて、後は言語体験の機会を豊富に与えて自然養殖するのに任せればよい。我々が学習したものが核にまでなっていないのに先へ先へと進むから、努力している割には進歩が思うようにいかないのであろう。核を学生に植え付けるのを「教養英語」の目標にしてはどうか。まず核を作って、それから表現は性格だから性格に見合った表現を数多くの洋画ビデオを見て学生自ら工夫させなければならぬ。

使わない刀は錆びる。使わない表現は忘れられる。表現は文法的に整理分類されるよりは、表現に実際に利用されてこそ効果的に学習されたと言えるのではないだろうか。表現は本質的に文法範疇に分類するためではなく、表現に使われるために存在している。自分が使って、表現してみればじめてその表現が分かる。表現は使おうと努力する過程の中で覚えるのではないだろうか。

書くことは考えることだ。話すことも考えることだ。表現は思考なのだ。しかしこの本来考えを伴っているはずの話すことの練習が、第二外国語学習の過程で往往にしてパターン・プラクテス、サブスチチューション・ドリル

などという思考を抹殺する、言語学習においては本質的に不自然な学習方法によって、効果の上がらないものでなっている。パターン・プラクテスという学習方法を多用する現在の英会話の教科書では殆ど効果が無い。

自分の文脈から自分の表現として学習した表現を使わせる。10回の機械的パターン・プラクテスより1回の「自分の表現」の方が印象深く心に染みるはずである。パターン・プラクテスのように、聞かせてろくに考えもさせずにすぐ言わすのではなくて、聞いて書かして言わしたらどうか。書くことを通して聞いたことを考えながら応用させたらどうか。学習した英語表現の例文を一つ作らす。この例文は自分の視点から自分に拘る発言でなければならない。学生が思い付くなら、三つ四つと書かせる。機械的に作られたものは認めない。(しかし学習した英語表現の応用への展開は性急にやらせてはいけない。性急にやらせると自信を失わせるから、言語学習は嫌な作業と思わせるようなことはしないほうがよい。) 外国語学習でも言語使用の迫真性を大切に考えなければならない。パターン・プラクテスをするにしても、数ではなく質である。迫真性・切実性を問題にして、機械的な惰性に陥らないようにしなければならない。

表現は、思考を背景にして、思考に裏打ちされて、初めて学習されるのではないだろうか。思考を伴った表現を通してしか、表現は学習できないのではないか。思考を伴わない機械的表現をさせてはいけない。表現を空打ちさせないように学生を指導しなければならない。核という考える道具を効率よい学習で学習者に送り込むことによって、言葉の機械的な暗記を防ぎ、自分から外に向かう表現の流れに学習者は学習中の慣用表現を送り込むことが出来る。

必要度の高いもの中心に私の言う核を修得すれば後は1人で、留学など甘くない現実に遭遇しても耐えてやっていける。この充分に核になる語学力を作ってやるのが大学「教養英語」の目的ではないだろうか。核ができた後は自習用教材で展開するなり、英米語圏で自然な言語学習がやって行くようにしたら良い。

5 洋画導入への具体的提案

それでは最後に洋画を具体的にどう授業に取り入れるかを素描してみたい。

良い学習方法とはどのような方法であろうか。それは英語の語学力を付ける方法であろう。顕著な効果を保証しない方法は良い方法ではない。それは、教材などを体系的にプログラム化して、他の方法に比較して相対的に少ない労力を要求するものでなければならない。教材・進度・難易度など全てプログラムに組んで体系化しある程度継続的に学習しない限り、学習方法は良いか悪いか証明できないのではないだろうか。

良い学習方法で学習していても、学習量が少なかったり、体系的なプログラム化が遅れていたり、他のクラスの英語教師がまったく異なった方法を採用していると、良い方法を実験的に模索している工夫好きの教師が小数いても顕著な効果などとてもを上げることが出来ないであろう。本稿で主張しているように洋画は教材として大変優れたもので大いに期待して良いが、たった1人の教師が週1回90分1年間たった1本の映画をいくら詳しく見、徹底的に我々の弱点である耳を訓練したとしても、その方法が良い方法であることを顕著な効果を上げて証明することは出来ないだろう。

洋画教材は、計画的・系統的に大量・執拗に提供しないと本領を発揮しない教材である。洋画教材の使用に際しては、ハード、ソフトの両方の開発で教師が時間を十分に掛け、考察を重ねるべきである。中途半端に導入して本領を発揮させないと、日本の英語教育からこの洋画教材は葬りさられてしまう。日本の英語教育のためにこのような状況を招くことは余りにも惜しい。

映画は学生が大喜びする教材であることは実際にやってみて疑い得ない事実であるが、教材の編集、年間の進度計画などで学生の喜びに迎合するようなことばかりやってはいけない。学生が喜ぶことばかりをクラスの基準にしていると、外国語学習では避けて通ることが出来ないある程度の苦労・努力を学生にきちんと要求出来なくなる。しっかりした興味深い教材を学習効率

の良い進度計画の下に体系的に教え、語学力の顕著な増大をどの学習段階でも学生が自ら感じとることが出来るようにしてやるのが大切であろう。学習意欲を沸かせる授業をしなければならない。「この方法でこの教材をこれだけやっていけば語学力は確実に付くぞ。」無味乾燥なことの多い外国語学習で学生がこう思えることこそが、学生の考えられる最大の喜びではないだろうか。彼らにこの喜びがあれば宿題を出すことや、試験を課したりすることはそれほど大した苦痛を彼らに与えないはずだ。

読解力養成にしても、訳読などという原始的で幼稚な「方法」ではなくて、大型コンピューターを駆使して徹底的に学習効果を考えてプログラムを組んでみるべきである。イメージ・スキャナーで図形として登録された情報ではなく、OCR⁵⁾で英米の名著から入力され文字として認識されるデータ・ベースを作る。映画台本せりふ情報によるデータ・ベースと名著活字情報によるデータ・ベースとを一緒にして、聞く力と読む力の両方を向上させる為に利用してみよう。両データ・ベースに、「特定の複数の慣用句や語彙を1500語以内の量の中で含むものを捜せ」と指示を出してふさわしい例文を捜し出し、読解力養成用の教材の中に入れてやると良い。シェイクスピア、ミルトン「講読」コースのための読解力を養成するのなら、コンピューターで語彙、構文、頻度などを調べて日本人大学生に学習し易いようにテキストを編集したら良い。読解力養成を計るのなら、学生のために学習効率を考えてやらなければならない。一年に100頁やそこらの教科書を読んで訳しては大きな読解力養成は期待できないのである。速読術なども含めて考えてやらなければならないのではないか。又これは思い切ったことであるが、「状況の知識」を与えにくい単なる印刷物は、「教養英語」、専門英語に関わらず、なるべく教材に採用しないようにしたらどうだろうか。つまり英語講読、米文学演習等の授業でも、教材は「状況の知識」を十分に与えるビデオ教材が手に入るかどうかで決めるのである。英語基礎力を養成する段階では、英米の大学教科書をそのまま採用することは出来ないのではないだろうか。

映画としては感動させるが、英語学習の効果はさほど上がらぬというので

あれば、教養「英語」の教材なのだから困ったことである。映画を鑑賞させるというよりは、学習プログラムの体系化を本格的に研究して、映画をもっと教材として考えてみなければならない。例えば学校文法の体系のようなものをオーディオ・ビジュアル情報データベースの中から作って、「教養英語」卒業必要単位の4クラスのそれぞれで最低限これこれを学習するようにするとする。映画の芸術性に溺れず、名画などではない映画からも学習すべき優れた英語表現を収集して、学習者が学習し易いように編集すべきである。映画としての芸術性より、映画教材としての利用価値を最優先して映画を「編集」すべきである。学生に映画芸術として感動してもらうのは、授業以外の時間にグループあるいは個人でフィルム・ライブラリーからビデオを借りだしてブースでしてもらうか、学内映画会の場にしてもらう。授業では映画を何よりも語学学習に効果のある教材として考えなければならない。

前期8本の洋画を詳しくみて頻度の高い慣用表現として、“make it”、“take it”、“make love to”、“to speak my piece”、“Now you’re talking”、“step on”、“get somebody”、“be scared of”、“penny-ante”、“get to”、“get somebody behind bars”、“be up to”、“in a nutshell”などがあった。8本が500本1000本2000本と増えていけば、頻度の高い表現、単語がはっきりと出てくるであろう。それらは日常生活での最も使用頻度の高い表現と重なるはずである。それらの表現を集中的に効率を考えて学生に叩き込むのである。

“make it” という表現を教えるのなら、文法的な説明などそこそこにして、10、20と例文を見せたら良い。「例文を見せる」とは辞書とか文法書から掻き集めた活字例文をプリントで学習者に渡すことではない。新しい慣用表現の学習を2、3の例文で済ませ、後は文法の知識で推測させるということはしてはならないことである。状況が全く想像できない、新鮮さも面白味も無い活字の列をいくら見せても、その表現が学習者の中で生き残って学習者自身の表現の中に活かされるということはまず無いといってよかろう。

たとえ文法の助けを借りるとしても、視聴覚を通して我々に入ってくる表

現を生き生きとした発話の一塊として覚えていくのが、長い目でみれば結局英語修得につながっていくのではないだろうか。状況の中で表現を覚えていくのが、母国語学習、外国語学習のいかに拘らず、いかなる言語学習においても基本であり鉄則であり王道ではないだろうか。私の言う「例文を見せる」とは、現在のLLの装置では夢物語であるが、実現はそんなに難しいことではない。

この夢の実現に向けて我々はまず英語字幕付き洋画ビデオを可能な限り大量に揃え、取り出した英語字幕をパソコンに入れる。2HDフロッピーで軽く15本以上の英語台本が入るから、例えば80メガのハードディスクなら少なくとも1200本、130メガなら2000本の洋画台本のせりふが情報として入る。状況が判別出来る最小単位に細分化して、それを収録してデータベースとする。

入力された映画台本情報をどういう原理、キーワードで引き出して整理するか相当研究しなければならない。前述したように「表現に使用することを念頭に置いて、学生が表現に再生し易いように整理」出来ないか探るのも一つの道である。あるいは文型とか表現の種類によって整理した慣用表現別が良いか、文法用語別が良いか、学校文法、受験参考書の目次など利用したら良いか、考えることは多い。入力された映画台本せりふ情報のコンコーダンスを作って⁶⁾、頻度の高いものを集中的に最初に教えるようにしたらどうか。頻度が多いということはそれらの語が日常生活の網の目になっていると言うことだろう。大きな網の目をまず理解させて、より木目の細かい網の目を理解させるように仕向けたらどうだろうか。収集したせりふ情報を頻度順に整理し頻度の高いものを教材として学生に提示するといっても、提示の仕方を実際の授業での実験を重ねて学習効果を相当調べなければならない。

単純な頻度順に提示するよりは、ある程度の頻度以上のものを文法的に整理して文法項目別に提示した方がよいかも知れない。英語教育の元凶の一つとして私は文法をこれまで糾弾してきたが、学習効率を上げるには闇雲に教材を提示しても駄目である。文法を教えるのではなく、文法に分を弁えさせ

て脇役に徹するようにさせる。つまり学生に文法を文法として提示するのではなく、学生への教材提示方法の背後の原理を文法に依存させるのである。余りきっちりと文法を学生に意識させすぎると、「形而上性」に学生が走ることも考えられる。文法的に整理して実例を提示するが、学生には余り文法を意識しないようにさせる。大量の洋画が格段に使用し易くなったことで、文法や英文和訳、和文英訳を表に出さずにやれる外国語教育が歴史上初めて可能になった。この意義を忘れないようにしなければならない。授業での実験も重ねて最も学習効果の上がる方法を模索しなければならない。文法に助けを求めて省エネを計ることも必要だが、文法に学習効果を阻害させないようにもしなければならない。

次にソフトのみならずハードもこれから新たに開発しなければならない。大容量レーザー・ディスクのようなものの中に納められたデータベースに500本、1000本の洋画の音声と場面を、映画の非言語部分（効果音、音楽など）を全て除いて、英語教育に有益な部分だけを、「状況の知識」が充分に分かるように、数十秒から数分の場面に細分化して、収録する。そして英語字幕情報を入力済みのコンピューターとつなげてキーワードを入力する。検索機能を使って特定の単語・句・構文の実例一覧表をそのデータから画面に出し（この一覧表の中には出典、シーンの所用上演時間なども入っている）必要な番号を10でも20でも押すと順次に教室その他のテレビ画面に、例えば、“make it”の含まれている場面が、その状況が分かる最小単位で次々に出て来る。同意語や反意語表現の実例場面も教室や編集室で次々に参照出来る。⁷⁾ (key words, key sentences を共通に3個4個と含んだスキット風のシーンを多く画面に出した方が、key word, key sentence 1個のシーンを連続するより効率が良い。) バーコードなども利用すればピーとなぞるだけで瞬時に映像検索・表現検索をすることが出来るようになるだろう。

このように学習者の目と耳から50, 100という例文を見せ、表現の多様な生きた展開に学習者の身を晒すのである。私の言う「例文を見せる」とはこういう意味である。同じ文章を部分変更して覚えさせていくパタン・プラク

テストやサブスチチューション・ドリルも良いが、様々な使用例を数多く展開して覚えさせることがより自然で効果的ではないだろうか。英語字幕付に注目しているのは、入力の手間が省けるからであるが、目の不自由な人のために開発されたカーツワイル・パーソナル・リーダーのような実用的な OCR が入手できれば、台本さえあれば英語字幕付でないビデオでも教材として十分使える。テレビを見ている学生の注目を引き易い位置で「まもなく<< >>の表現が出ます」と予告していく装置を開発したらどうだろうか。有益で覚えておくべき表現が出てくる直前の箇所で、注目表現がちかちかと点滅して学生の注意を引くようにすれば、テレビ画面の中に組み込まれる closed caption が付いていなくても問題ではなくなる。

次に見せる洋画をプログラム化する。1年次にはこれ、2年次にはこれ、3年次用にはこれこれと難易度を決めて体系的に学習させても良いかもしれない。何本見れば、あるいはこれこれをこれだけ修得すれば初級だとか中級だとか工夫できないだろうか。1年入学時に調査して能力別にクラスを編成できないだろうか。TOEFL が550以上とか、英検1級を取っていたら一般学生より高度なプログラムを与えた方がよい。単位を与える授業と並行して、上級、初級等という資格試験も実施したらどうであろうか。そのために授業とは別に自習用プログラムをより程度の高いコースを目指す学生の為に開発したら良い。洋画4・5本から10・20本までで1セット（例えば初級1とか中級7）を作ったらどうだろうか。（ミュージカルとか、音楽、音響効果が多い映画は語学教材としてふさわしくないから、このセットの組合せの中から当然省く。）1年間の授業では、このセットの範囲内で慣用句などの実例場面が教室の画面に出てくる。授業を2時間潰して最初に映画全体を見せるというようなことは効率を考えてしない。出典は絶えず明示しているから、学生が原「画」全体を鑑賞してみたいときにはいつでも LL の自習用ブースで見れるように設備・制度などを整える。2年間の「教養英語」で現在4齣8単位を取る必要がある。4セット取ればかなりの映画を見たことになり、自然なスピードでの英語の音に学生を晒すという点では良いのではないだろ

うか。2年間で合計20本から30本の洋画を授業で詳しく勉強した学生にオールラウンドな英語力を期待できないであろうか。無理なように見えるが、興味のある洋画なら学生は付いてくる。あらすじなどの情報は *Motion Picture Guide*⁸⁾ などで調べて渡しておく。貴重な授業時間は実際の英語学習に使う。

90分週1回が外国語学習に向いているのだろうか。外国語のクラスは「講義」なのだろうか。週1回の90分とか100分の授業ではなく、例えば50分授業を週3回組んではどうか。英語を教えるクラスは、講義・授業としてではなく訓練としてとらえなければならない。外国語学習の授業では、教師が必ずそこにいて「講義」をしなければならないということはない。LLでの訓練は、時に教師不在の方が良いのではないだろうか。コンピューターに出席管理を任せたらどうだろうか。磁気カード学生証を入れると、何月何日何時何分から何分間そこで何課を学習したという出席状況記録が自動的に行われる。また個人別記録によって、コンピューターが進度を調べその段階での教材を自動的にプリント・アウトし学生に提示する。また学生の希望によってコンピューターが出題・採点し学習の手助けが出来るようにプログラムを組む。このコンピューターによる試験はあくまで学生の自習のためのものであって、教師の学年末評価になんら影響を与えない。こういう風にコンピューターがフルに活用されるようになれば、専任と非常勤、事務助手そしてブースでの自習時間を組合わせて学生の学習効果が上がる時間割を考えて、30分でも50分でも週3回でも5回でも訓練を行ったら良い。

「教養英語」は全部1・2年次にする。第二外国語としての英語の母国語専門家よりは日本人教師にこの基礎のレベルは任せたほうが良いのではないだろうか。3・4年次で数科目外国人教師の科目を取らすように指導したらどうか。英語を母国語とする外国大学所属外国人教師による専門科目の授業を上級学年で可能にする必要がある。また1・2年次で学習した英語表現を上手に3・4年次学生の表現に生かす為に、英語を母国語とする人、あるいは英語で授業をやれる日本人が必要になってくるであろう。学生の表現に効

率よく生かす為に、担当者はどのような語彙、慣用句を学生が1・2年次に学習したのか前もってよく知っておいて、極力それを授業で実際に使用してやるべきである。担当者間、クラス間の連絡が密になるようにするためにも、教材・プログラムなどをしっかりした体系にしなければならない。

単位とは別に自習プログラムを作ってやって意欲のある学生を伸ばしてやることも真剣に考えるべきである。

またいかに多くの映画を見せるかも工夫しなければならない。授業だけではなく課外時間にも、教室以外の学内いたるところで英語の音を満ち溢れさせよう。洋画ビデオソフトはただ単に英語の授業で優先的、独占的に使うのではなく、全学生、全教職員のために解放して効果的に使用すべきである。教職員・学生の学内での利用のために、個人でビデオを見れるブースを何十と準備したり、グループで見れる小さな部屋を用意したり、ソフトを気楽に利用しようという環境・雰囲気作りを大学当局はしなければならない。学外貸出も時によっては検討すべき課題になるかも知れない。

学内映画会を頻繁に開くことも一つの工夫である。英米の諸大学では週末の金曜の夜ともなると学内のあちこちで映画会が開かれ名画を安く楽しむことが出来る。名画ビデオを整備して全学の構成員向けに「金曜洋画劇場」「新入生歓迎アルフレッド・ヒッチコック週間」「キリスト生誕記念映画祭」「アメリカ古典映画週間」「イギリス小説映画化特集」「フランク・キャプラ週間」「シェイクスピア映画祭」「イングリッド・バーグマン主演映画特集」などを随時学内で開くよう企画したらどうだろうか。次々に入って来る洋画ソフトの情報もコンピューターに納めて、監督別・俳優別・文学作品映画化特集などのテーマ別に所蔵フィルムグラフィーが簡単に作成出来るようにし、所蔵ソフトの情報を学内に頻繁に流し利用促進を計らなければならない。ソフトを貴重品扱いして死蔵することは絶対にあってはならない。つまり、正規の授業以外でも「英語の〇〇大学」の雰囲気を学内に自然に満たしたらどうだろうか。

英語の「核」を「教養英語」でしっかりと身に付けさせて、後は専門科目

の学習を通して効果的に学べるように、英語教師が配慮してやらなければならない。読む力偏重の時代は過去のものとなり、現在は音も重視して聞く力を養成する時代に入っている。これを更に進め話す・書く能力の養成にまで向かわなければならないのだが、この表現能力の養成はいわゆる「英会話」の授業では駄目で、専門科目と連携しなければならない。日常会話学習ばかりをいつまでもやっていく余裕など、専門家への訓練の道を歩みだした学生にはないということを、英語教師は理解してやらなければならない。どちらかを取れと言われれば、学生は英語よりは専門科目を取るであろう。このような学生に合った英語学習を工夫すべきである。英語屋を養成する英語学習ではなく、学生を専門家にする英語学習、つまり専門家への道を歩みつつ学生が学べる英語学習でなければ、彼らの英語学習は長続きしないし、「教養英語」での我々の努力も無駄になってしまう。学生が専門家へなろうと努力する過程で、彼らを助け彼らに役に立つと彼らに思わせるような英語学習にしなければならない。この点で外書講読などの専門科目も「教養英語」との関連で考えてみななければならない。専門科目などで英語圏の教材⁹⁾を各学部の教員が使い易いように英語教員が協力してやることも必要であろう。「教養英語」で植え付けられた「核」を、専門科目などで展開するのを英語教師は惜しみなく援助しなければならない。片言の日常英会話も出来ない、専門の知識があるようにも見えないでは、英語圏の世界に入っても学生は生活していけないのである。専門家の卵として英語圏の世界に学生は入って行くべきである。学生は英語圏でアナウンサーになろうというのではないのだから、多少イントネーションや発音が悪くても良いと割り切るべきである。いつまでも英語の日常決まり文句ばかり練習しても飽きがくるのは目に見える。つまらないことを英語でわざわざ言う必要はないのだから、話す内容を磨く方が賢明であることもある。

6 むすび（まだ訳読をやっていて良いのだろうか。）

以上が、英語教授法の専門書など何一つ読んだことがない文学畑の一人の英語教師が、映画教材の出現に喜び・興奮して、この一夏掛けて「教養英語」への本格的導入を模索してみたものである。ここで「体系的」の語に付いて一言お断りしておかなければならない。「教養英語」の授業の全部で映画教材を使おうと提案するつもりもないし、それほど映画教材の優秀性に確信を持たたとは言いがたい。「教養英語」は現在クラス指定されているが、様々なコースを設けて学生の目的によって最低1コース選択させても良いのではないだろうか。設けるコースには例えば次のようなものが考えられる。

基礎読解力コース（人文学系、社会学系等の分野別必要語彙・表現をコンピューターを駆使してその分野の文献で頻度調査し、教材を作成する。速読も教える。）

サバイバル英語コース（春・夏の英語研修に備えて、研修中に必要と考えられる英語表現を集中的に学習させる。臨場感溢れる本場での実習を効率よく英語学習に学生が結び付けられるように様々な工夫をする。）

英語表現力養成コース（優れた散文で巧みな英語表現を学習して、英語散文できちんと主張出来るように指導する。）

総合力養成コース（洋画使用の「教養英語」はこのコースにしたらどうか。）

いずれのコースも各クラス間に関係を持たせて本当に学生に語学力が付くように教材・プログラムを体系的に考えなければならない。

(1) 英語字幕、OCR の発達などで大容量の洋画せりふ情報データベースの構築が個人の英語教師にも数百万円の出費で極めて容易になった。(2) 活字教材を日常生活並の映像で補強できる。この2点で映画は素晴らしい可能性を秘めた教材である。本稿でながながと主張してきたことを要約すれば、今までの大学「教養英語」教育は活字教材に主に頼ってきたが、学習効果を

真剣に追求するならば、洋画中心に大学「教養英語」プログラムを作れるのではないかということである。さらに、週1回90分で1年間というのが英語のクラスに向いているのか、単位制がよいのかなども問題提起した。つまり、大学「教養英語」教育はこれで良いのかということである。学生の学習効果を上げることを可能な限り優先して考え、英語教育の改革を推進すべきではないだろうか。

今後本稿で主張していることを実現していくためには、英語学習の心理学を専門家の本格的な研究書から学んでいかなければならないことは言うまでもない。我々の知っている日本人・外国人専門家を研究会などの仲間に入れて、彼らから理論面・実戦面で学ばなければならない。

我々人文学畑に所属する教師もコンピューター、OCR、LL 機器、ビデオ、アダプター等を使用する能力を要求される時代になってきた。このような時代を恐れることなく、英語教育の機械化を進め教材、プログラムなどの体系化を計らねばならない。洋画教材の出現が我々に要求していることはこのことであろう。

しかし最新機器と共に洋画を提供しているこの時代が我々に最も要請しているのは、我々英語教師の側の意識の変革ではないだろうか。学生の側に立って考え、学生の学習効果が上がるかどうかをまず最優先して考えて欲しいと時代は希望しているのではないだろうか。学生の学習進度、効果など全くお構いなしで、教員の専門に關係する教材を訳読するなどということは、例え学問の自由という隠れ蓑を纏っていようが、絶対に我々は認めるべきではないと思うのだが如何なものであろうか。

最後に本稿のもう一つの目的に付いて繰り返さねばならない。顕著な学習効果を上げている大学「教養英語」プログラムがあるのか専門家に問うのが、本稿の元々の目的であった。素人の私は寡聞にしてそのようなプログラムを知らずに、本稿で自己批判したような教育法を我流で採ってきたのであった。なになに大学で実験されているかくかくの優れたプログラムを全く知らないというのは、本稿での主張がいかに素人の無知に基づいた誤りだらけのもの

であるかを示している、とご教示を頂くようになるならこれほど嬉しいことがあるだろうか。私はいつでもその方法を検討する用意があるので、本稿での論議を素人の意見などと看過せずに、顕著な学習効果を学生が上げられる方法を示して頂けたら幸いである。

注

- 1) *Spellbound* (ABC Video Enterprises 社から英語字幕付ビデオが出ている。完全台本はイメージプロダクト社から入手出来る。)
Notorious (ABC Video Enterprises 社から英語字幕付ビデオが出ている。完全台本はイメージプロダクト社から入手出来る。)
The Birds (MCA Home Video 社からビデオが出ている。英語字幕付ビデオはまだ出ていない。完全台本は英和対訳シナリオシリーズNo.5『鳥』として南雲堂から1963年に出たが、現在では入手出来ない。)
Guess Who's Coming to Dinner (Columbia Pictures Corporation から英語字幕付ビデオが出ている。完全台本はイメージプロダクト社から入手できる。)
Pride & Prejudice (ビデオはBBC 製作で、CBS Fox Video 社から英語字幕付ビデオが出ている。我が国では完全台本付で日本レンタルカラーから出ている。)
It's a Wonderful Life (アメリカの名監督フランク・キャプラの代表作。表現が豊かで映画教材としても素晴らしい。Hal Roach Studios Film Classics 社から英語字幕付ビデオが出ている。『素晴らしき哉、人生!』というタイトルで大陸書房から2200円という買いやすい値段で日本語字幕付ビデオが入手できる。英語教科書としては、開文社から詳細な注が付いたものが出ている。)
It Happened One Night (RCA/Columbia Pictures Home Video 社から英語字幕付ビデオが出ている。完全台本はイメージプロダクト社から入手できる。)
The Graduate (Embassy Home Entertainment 社から英語字幕付ビデオが、またニュー・カレント・インターナショナル社から英語教科書が出ている。)
- 2) 2HD 1本に120分ものが15本前後が入る。130メガハードディスクだと大体2000本入る。
- 3) 学生は語学力は無いけれど、知的レベルはやはり大学生である。このような学生に向けた教材は無いのだろうか。18才から英会話を習わざるをえない学生の知的関心のレベルと、現在出回っている会話教材の引き起こす知的興味との相関関係を調

べて学習意欲の問題を考えるべきである。会話、LL 関係教材は内容が幼稚で、大学生の知的レベルを満足させていない。英米から来た英語を母国語として話す人たちは、英語の下手な日本人学生の知的レベルを概して過小評価しがちである。彼らを選ぶ教材は概ねつまらない。

- 4) 受験参考書などには、文法知識の正確さを問う正誤問題や文法知識を応用した和文英訳が数多く載っている。文法規則を知っていればその規則に基づいて文章表現が出来る和我々は考えてきた。しかし文法に基づいて英作文などをしていくと、時にとんでもない不自然な英語になることを我々は知らねばならない。
- 5) 200万円前後を出せば手に入るカーツワイル・パーソナル・リーダーのような実用的な OCR があれば、洋画に英語字幕が付いているかいないかは大きな問題ではなくなる。活字台本さえ入手できれば、入力も OCR に任せて、台本のせりふ情報データベースが簡単に出来る。そのデータベースに映像データベースを連動させて、せりふ検索も映像検索も簡単に出来るようになる。
- 6) オックスフォード大学電子計算機センターで作成された MICRO-OCP という文章解析プログラムが使用できるかもしれない。NEC9800シリーズに対応したこのソフトの日本語バージョンが沖田電子技研で制作されていて、用語索引、インデックス、ワードリストの作成、頭韻（接頭語）、脚韻（接尾語）、フレーズ、共出語、1文やフレーズの検索などが出来る。関連図書として『文章解析入門—— OCP への招待』（オーム社、昭和61年）がある。
- 7) 編集機も開発しなければならないハードの一部であろう。パソコンの文章解析ソフトの指示に従って、“make it” の実例場面を各洋画ソフトから拾い出して次々に画面に効率よく出してくれるような編集機が必要である。
- 8) Evanston, Illinois の Cinebooks 社からの年刊本である。
- 9) 例えば The Annenberg/CPB Project の、様々な分野で賞を受けている英語字幕付ビデオ・コレクションには次のような分野のものがあり、専門科目で大いに利用出来るのではないだろうか。

Ethics in America

War and Peace in the Nuclear Age

Voices & Visions

The Africans

French in Action

The Write Course: An Introduction to College Composition

(以上 Humanities)

洋画使用の大学英語教育

The Brain

The Constitution: That Delicate Balance

Congress: We The People

Economics USA

The New Literacy: An Introduction to Computers

(以上Social Sciences)

The Mechanical Universe... And Beyond

For All Practical Purposes: Introduction to Contemporary Mathematics

Planet Earth

(以上Science and Mathematics)

(1989. 11. 30 受理)

Films as Part of the English Curriculum at Colleges — a Proposal —

Noriaki NAKAI

I criticize our way of teaching English at Japanese colleges in terms of (1)its obsession with Japanese translation; (2) its excessive stress on the study of English grammar ;and (3) its ignorance of the necessity of encouraging students to express themselves.

Speeches are acts of involvement in situations; they produce and expand developing networks of relationships in situations. Some sense of being in the situation is indispensable even for the student learning foreign languages. Our failure to give a Japanese student trying to figure out an English text the sense of being in the situation of the text leads to what I call excessive “metaphysicality” in language learning.

The cause of the Japanese student’s obsession with Japanese translation is the failure of the English teacher to sufficiently provide the student with the sense of being in the situation of the text. Unable to get the sense, the student feels remote from the text, asks for help, and resorts to Japanese. The student begins to approach the text metaphysically, in terms of grammar, becomes detached academically, and loses a sense of “illocutionary force” of the text.

My proposal is that we use close-captioned British and American

films as a revolutionary teaching material to complement situational knowledge, the lack of which has been leading students, away from English into Japanese and into grammatical metaphysicality. Films can overcome the three defects arising from our English curriculum. My hope is that the everydayness of films will provide students with sufficient situational knowledge to grasp the dialogues. It saves them from reverting to Japanese and to grammar, and by inviting them into situations lets them connect situations and speeches.

There is another reason for my recommendation of films as a revolutionary teaching material. If we can afford to collect 1000 close-captioned films, we will have a database of colloquial English expressions: a hard disc of 80 megabytes can contain the entire scripts of more than 1200 films; for 2000 films we need 130 megabytes. With the help of the MICRO-OCP of the Oxford University Computer Center, we can analyze the frequency of colloquial words and phrases in the database of such film-scripts. I propose to edit those film materials so that students can learn the most-frequently used English expressions with efficiency. The effect should be to encourage them to express themselves in English more persuasively.